

令部にて勤務

昭和二十年八月十七日 横道河子にて終戦

昭和二十三年五月十三日 ナホトカより帰る

昭和四十三年四月 掛川市栄川中学校PTA会長

長

昭和四十八年四月 掛川工業高校PTA会長

昭和五十四年一月十四日 全抑協補償運動に参加

(静岡県 石川 八郎)

北朝鮮敗走二週間と

シベリア抑留二年記

滋賀県 松村 晋二郎

まえがき

私の軍歴は、敗戦まで一年足らずの短期に三つの連隊を転属している。在ソ期間も一年八カ月と短期であり、他の收容所には変わっていないが、作業編制の都合で相棒の変更はしばしばで、顔は思い出せても、姓

名や出身地となるとほとんど覚えていない。もし私がシベリアで倒れていたとしても、その死にざまを伝えてくれる人はなかったのではと思う。死生苦楽を共にしながら、今日語り合う戦友や戦友会のないのが寂しい気さえする。

私は昭和十九年十月十日、歩兵第七五連隊第三中隊（会寧）に現地入隊した。北朝鮮の清津と会寧を結ぶ線を底辺とした三角形の頂点にあたる茂山にあって山鉾山の職員として二年十カ月勤務し、徴兵検査の結果（甲種合格）入隊したが、現地入隊は中隊で十名ぐらいたった。他の同年兵は新潟県新発田連隊からの人たちであった。同連隊は、かつて張鼓峰をめぐるソ連軍と激闘して以来、北の守りに任じており、私の入隊時には、昭和十六年兵以来の現役兵ばかりであったが、二カ月後にはルソン島へ動員された。二カ月間の猛訓練と内務班の教育は今も忘れない。

昭和二十年一月には、再び新潟県から初年兵を迎え、奏歩兵第二九〇連隊が新しく編制された。この部隊も、七月ごろからソ連軍の進攻に備え、鮮満ソ国境の南陽

方面に展開するため移駐した。私は同年四月一日から兵科幹部候補生として二カ月から三カ月大隊の集合教育を受けていたし、甲、乙に分かれバラバラになった。

私はそのまま留守部隊に残され、七月徴兵制により集められた朝鮮人兵の教育係として内務班で起居をとにし、射撃の速成教育に当たった。つまり、奏部隊に籍はあってもないのと同然であった。八月に入り、最後の召集により集められた（根こそぎ動員といわれた）老兵に、朝鮮人兵、奏部隊からの転属者を基幹として、扶翼歩兵第三七五連隊が新しく編制されたが、日ソ開戦と同時に会寧を後に咸鏡南道の咸興近くの定平まで南下し、近くの山中に入り陣地構築することになったので、扶翼部隊の連隊長、大隊長の顔はもとより、中隊長の姓名、顔すら知らない急造部隊で、小銃でさえ全員に渡らなかつたと覚えている。

私はその間、定平駅前で中隊の食糧などを受領する任を与えられ、幕舎生活を数人とともにしていた。戦況は、羅津、雄基にソ連軍が上陸、清津にも十三日には上陸して、交戦中、咸鏡北道は戦場化したという、

不利なものばかりであった。そして連命の重大放送があったという十五日、放送を聞くすべもなかつたが、私は現地の人目つきが変わり、街の様相が一変したのに不吉なものを感じた。いつの間に用意されていたのか太極旗（朝鮮国旗）や赤旗一色となり、解放された喜びに乱舞している様子を見て、これまで戦争遂行に何の違和感も感じなかつたのに、一夜にして別人と変わったことに、やはり彼らは異民族だつたと思いつらされた。

その後、目的、行き先も知らされず乗車し、定平を後にした。二十日ごろ平壤に入ったが、どうやら身動きできないよう下車、秋乙にあつた空き兵舎に何日ぶりかで落ち着いた。ここではどうやら無条件降服らしい、いや、終戦でソ連軍の指示の下、帰国できるのではといった流言が飛んだ。同月二十六日ごろソ連軍が進駐してきた。まず、将校、下士官、兵と宿舎を分離し、武装解除された後、ソ連軍司令官の閲兵を受けた。ソ連の侵攻に遭うや、北辺の会寧を後に、敵の砲火を尻目に戦うことなくこの二週間、北朝鮮を東か

ら西へ敗走しただけが、私の参戦体験となった。

三合里（平壤）収容所へ

秋乙兵舎で帰国への淡い期待を抱きながら帰国準備をしていたところ、九月一日ごろ、急遽移動のため集合させられた。行き先はわからないが、どうやら郊外に向かっているようである。やがて、初めて聞く「ダワイグワイ」の声で追い立てられ、帰国用の梱包も次第に重荷となり、次々と路傍に捨てられていった。着いたところは三合里という旧軍の演習廠舎であった。

周囲は鉄条網が張りめぐらされており、格好の収容所であった。ソ連軍の監視下におかれ、初めて今後はなるようにしかならないというあきらめの心境になったと思う。

ここでの生活は比較的平穏な日々であった。何日かに一度ソ連軍に何名かを使役に出したり、我々の炊飯用の薪とりの使役ぐらいで、あとの者は全く用はなかった。暇つぶしに苦勞する状況であった。入所後どのようにして大隊編制されたものか記憶はないが、私たちは馬屋で寝起きしていた。馬一頭分のスペースに一

個分隊が割り当てられ、昼はともかく夜は頭を交互にして寝るのが精いっぱいであった。

そうこうするうち、どこかへ移動する部隊が出始めた。私たちの部隊も、日時は忘れたが、十月下旬ごろ移動することとなった。

興南収容所へ

平壤駅でいつものように乗車させられたか、その辺りの記憶は定かでないが、有蓋貨車にすし詰め的狀況であった。行き先は例によって東京へ帰る（ダモイ・トウキョウ）である。平壤駅を発車したものの、軍用列車優先で、対抗するたびに各駅ごとに長い停車と夜間は全く停車するというノロノロ運転であった。各駅には朝鮮人の物売りが、もち、するめ、たばこなど、いろんなものを売りに来るので気がまぎれるが、困ったことは、昼間は私たちの監視役のソ連兵が、夜間になると強盗に早変わりするのである。車内に便所がないので夜間に車外に出るが、トントんとノックするので扉をあけた途端、ソ連兵が二、三人飛び込んで来るなり、周辺の兵から手さぐりで身体検査をして、要領

よく金品を強奪していくのである。その後、扉の開閉には用心したが、かなりの被害者があった。私もその一人であったが、「内地へ帰れるんだから金なんか……」とあきらめたが……。

十日ぐらいかかったと思うが、着いたところは咸鏡南道の興南であった。興南といえば日本窒素（今の旭化成）の工場を思い起こすが、日本海に面した興南港もあり、ダモイ・トウキョウが実現するのか、シベリア送りでいろいろ風評が立った。収容されたところは興南工場の寄宿舎で、八畳か十畳ぐらいの部屋に一個分隊（十二名）が入るので、ゆとりはないが、畳がずいぶん懐かしかった。

ここでの作業は、ソ連軍が満州や北朝鮮の重要工場から撤去した資材や日本軍から押収した食糧などの荷役作業で、ここでも使役を割り当てられた人数以外は用はなく、平穏な日々が続いた。

そうこうするうち、例によつてダモイ・トウキョウに追い立てられ乗船させられた。船はソ連の貨物船で、なぜか今でも覚えているが、船名はサマルカンド号で

あった。戦利品である資材や物資が積み込まれた後、横になるスペースも与えられず、すし詰めの状況で、船内では飯盒炊さんもできないし、与えられていた乾パンで代用していたが、切れると生米をかじりながら飢えをしのいでいた。甲板には張り出した仮設の便所がつくられていたが、船の行き先が気になり、甲板へ出る人もふえていようだ。船は、いつまでも左手の陸地が見え、北朝鮮半島沿いに北上しているようであり、いよいよシベリア送りと悲観的であった。

私たちは昭和二十一年の正月を北上する船内で迎え、やがて着いたところは、異国風の白亜の木造建築が目につく港であった。どうやらウラジオストクではとのことであった。ここでは上陸することなく、出航した船は何時間かして辺鄙な港へ着いた（後に知ったがこの港がナホトカであった）。ナホトカから無蓋貨車に乗せられ、何キロか離れた町（後で知ったが、テチユハという）へ着いた。密林を切り開いた平地に二棟の幕舎が建てられ、中は木製の二段ベッドで、仮設と思われたが、われわれは死んだように眠りについた。

收容所内のあれこれ

一カ月ほどしてから收容所（ラーゲル）を変わった。大隊長は落合大尉といい、将校は四、五名おられたが覚えていない。大橋曹長が主に指揮していたと思う。ロシア語の話せる人がいないので、現地で速成（ロシア軍将校家庭に住み込んだ）されたが、十分でなかった。收容所名や沿海州のどの辺なのかもわからない。テチュハと、いつしか覚えた。

ラーゲルは、どこもそう差異はないと思うが、周囲には有刺鉄線が張りめぐらされ、四隅には望楼があり、自動小銃（マンドリンと呼んでいた）を持った歩哨が監視に当たっていた。夜間になると強力な照明灯が真昼のように照らされ、近寄ると射殺するとのことであった。

日課の始まりは人員点呼である。大隊本部前に十人ずつ縦に並ばせる担当の衛兵（将校、下士官が主であるが、兵の場合もある）が一、二、三（アジン、ドヴァ、トウリー）と数えていくが、途中で忘れるとやり直すこともしばしばで、最後の列が端数になると算数

しにくいようで、兵の場合は時間のかかることが多かった。とくに暗算、掛け算が苦手なものには驚いた。冬場の点呼は大変つらかった。点呼で忘れられない出来事は今なお忘れない。確か二年目の正月であった。どう数えても一名足りない。衛兵総出で探した結果、別棟になっていたバーニヤ（ロシア式浴場であるが、主に衣服などの熱気消毒に使っていた）で縊死していたのである。一騒動となった。中年の家族のある人で痛ましいこととなった。とりわけ、その年の八月、帰国の夢がかなえられただけに忘れられない。

次は、われわれの命の綱である主食の分配である。いかに公平に分配するかである。主食である黒パン一日一片（三百五十グラム）は昼食用で、朝夕は飯盒のふた一杯のカーシヤ（かゆ）で、大体豆は浮いていないが豆汁であり、黒パンはソ連人でも二百グラム、三百グラムと目方で売られており、ラーゲル（收容所）でも一個分隊（十二、三名か）分を夜食（飯盒に半分くらいのカーシヤ）と同時に炊事からあがる。黒パンは高さ十五センチ、長さ、幅とも三十センチぐらいで

あり、何人分として目方で配給される。班内では人数分に縦横に切り、パン屑まで加えて等分に近づける。秤（はかり）がないので、目分量によるしかない。最後はくじ棒の出番である。いつごろ、だれが考えたのか覚えてないが、帰国まで必要不可欠なものであった。この他、マホルカ（葉も茎も一緒に刻んだ煙草）、砂糖、石鹼などの支給品の分配にも使われた。

黒パンの食べ方もまたさまざまであった。三等分にして、あるいは糞の目に刻んで時間をかけて食べる人、多くの人は夜食のカーシヤと一緒に食べ、一時的とはいえ満腹感を得るなどで、私も初めのころ作業場まで携行するつもりで袋に入れ枕許において盗まれたことがあって、以来、満腹感組になった。次に石鹼について思い出すことは、配給されても洗濯することがないので、つい雑のうに入れたままになる。毎月ではなかったが、所持品検査が行われ、石鹼は確実に没収される。つまり不必要品と見られるが、配給品は変わりなく支給される。これがソ連流かなと不思議に思った。

その他、今思うとつらくみじめであった体験は、栄

養失調症になると小便が頻繁になるようである。室外にある便所で小便を済ませ室内に戻ると、体じゅうが氷のように冷えきっているので、暖房機に擦り寄って体を暖めた後ベッドに入るが、横になるとまた行きたくなるので起き上がるという動作の繰り返しである。何人かの人も同じことを繰り返しながら、目が合っても会話がないという状態であった。

二年目のいつごろからか日本新聞が配布されるようになった。内容は天皇制批判、軍国主義批判、日本国内ニュースなどが載っていた。その中で、階級章を外そうという提起があった。捕虜になった以上、将校も兵もない、苦勞をともにすべきだとの趣旨から階級章を捨てたが、抵抗はなかったように思う。新聞については、活字に飢えていたのでむさぼるように読んだ。小林多喜二の小説「蟹工船」が連載されていたことを覚えていた。ラーゲル内での民主教育なり運動は、一部希望者のみの学習で、広がらなかったようであった。日本新聞は情報を得るためには貴重であったが、それ以上にマホルカの巻き紙として重用されていた。

働かざる者食うべからず

入ソ二カ月ぐらいして、労働させられることとなった。まず体力検査が始まった。ズボンを下げ、尻を丸出しにして軍医（主に女医）の前に並ぶ。軍医は一人ずつ尻の肉をつまんで、皮下脂肪の張りぐあいで一〜四級までに区分される。一、二級は重労働、三級は軽労働、四級はオーカーと呼ばれ、労働免除である。

私は一年ぐらいは重労働組であった。

初めゴルネーと呼ばれる金属鉱山（鉛鉱か）の坑内作業にまわされた。防寒帽、手袋、靴、外套など日本軍のものが支給された。衛兵所横につるされたレールをたたいて出発のための集合を知らされた。交代制のため、四、五十名の者に往復、銃を持った監視兵（カンプーイ）が前後につく。初めはわが方の将校が二、三名先頭に立った。街（住宅）並みを通るときは威勢よく軍歌を歌って行進した。しかし日がたつにつれ歌はなくなり、道端に立つ子供らと、物々交換による黒パンの小片を得ようとする様相に変わっていった。天気の良い日には窓辺に毛布が干されているが、星や錨

のついた戦利品には驚きであった。

カントラー（現場事務所）に着くと、ナチャリニツク（職場の長）の指揮下に入るが、カーバイト入りのランプ（戦後わが国では露店で見かけた）に数本のマツチ棒をもらい坑内に入る。ナチャリニツクより作業場の割り当て、作業方法、量（ノルマ）を身ぶり手ぶりで指示され、終了前に仕事量のチェックにくるのである。セメント袋の切れ端のような紙に、ちびた鉛筆をなめながら記帳するのである。いつごろからか、この記録が翌々日ぐらいの主食の黒パン（定量は三百五十グラム）に反映し、定量に二〇パーセント増えたり減ったりするのである。面倒なのは、日本人の姓を聞き取るのが難しいことである。例えばマツチはマチとしか聞き取れないようで、二人一組の仕事であるのに評価が別であるなどのこともあった。

坑内の主な仕事は、発破後の碎石を鉱車（一トントロ）積み込み、一定の場所まで搬送してあけておくのであるが、大きい石はハンマーで碎かなければならない。初めの日は三人で押ししていたが、ニエハラシヨ

(よくない)と言われ二人にされた。私の場合、入坑初日に新品の皮バンドを三角巾で巻いており、今まで見破られなかったのが、見破られ押収されたが、作業場で手心を加えられたのか、ノルマのないウインチ操作(女鋏夫とペア)に回された。が、長くは続かず、トロッコ押しや鑿岩夫の補助や測量士の補助等にまわされた。測量士は復員らしく若くて元気で、随分嫌がらせされた。豎坑の昇降は大変であった。測量機器を背負い、右手か左手にトランジットを抱え、カンテラを持ち、空いた手で竹梯子を一段一段昇降するのである。遅いと上から靴で頭(ヘルメットは着用)を押しさえつけるのである。しかし、坑内は寒暑が坑外と全く反対であるため、冬は暖かく夏は涼しいという利点もあった。

次にタイガーと呼ばれる伐採作業に回された。私には坑内作業の無理がたたったのか、急速に体力の低下が目立ち始めた。伐採現場までは現地收容所から歩いて初めは四キロぐらいであったが、その距離は次第に伸び、六キロぐらいになった。徒歩で一時間余の行程

となると、衰えた体力では容易ではなかった。晴れた日は少なく、たまの晴れた日の直射日光さえぬくもりを感じないし、いつも鉛灰色の曇天が多かった。作業は二人が一組となり、一・五メートルほどの長さの二人挽き鋸(ピラー)と斧(タポール)を与えられ、松の木(直径四、五十センチぐらいの立木)を倒し、枝を落として脇に積み上げるのである。ノルマは八立方メートルと聞かされたが、私たちの作業班は屈強な者は見当たらず、非力な者が多かったせいでもなからうが、幸いカンボーイは余りノルマには固執しないように、むしろ帰営時間に気を使うようでありがたかった。

伐採方法は、地上三十センチぐらいのところを斧である程度の切り込みを入れ、反対側から二人挽き鋸で倒れる直前まで切り、押し倒し、その直前に反対側に待避するが、一抱えもある立木が物凄い地響きを立てて倒れる様は壮観である。しかし、実際には予想外の方向に倒れたり、他の組の倒木と交差したり、他の立木に噛み合ったり、二人挽き鋸は気が合わないとテンポは狂いがちで、時には鋸が木に噛まれて動かなくな

って、思わぬ時間を浪費したりがしばしばであった。ペアを組む場合、気心の合う人は即定まるが、私のように全くの素人の場合、残った者同士で組むしかなかったので、思うようにはいかなかった。

作業班は四、五十人であったが、かなり広範囲になりがちなので、カンボーイは一目で監視できる場所を選び、たき火をしながら見渡していたが、われわれは寒さが体にこたえるので払い落とした小枝を集め、たき火をするが、その状況を見はからって時々空に向かつて威嚇射撃をすることもしばしばであった。よく見ると、たき火をしているとはいえず、この雪上で居眠りをしている時もあり、その凶太さに驚かされた。ナポレオンもヒトラーも勝てないはずだと思った。

一日の作業を終え帰途につく私たちは、寒さに筋肉もこわばり、着衣さえ重く動作が鈍くなる。ちよつとしたものにつまずいてもすぐぶつ倒れる。倒れたらすぐ起き上がれない。カンボーイのブイストラ・ダワイ（早く歩け）も夢心地であった。ラーゲルに帰るとまづすることは、湿った長靴（当時支給されていたソ連

製のフェルト）、外套などを乾かす段取りと、夕食を済ますと死んだように寝るだけであった。つまり毎日毎日が死と隣り合っているようであった。

コルホーズへ

二年目の五月ごろ、体力テストの結果コルホーズに回されることになった。厳寒のこの国も、夏ともなると真昼の太陽はじりじり照りつける。草刈り作業に何日か汗を流した。草は人並みの高さで、長い柄に大鎌のついたロシア鎌で、二メートルぐらいの間隔に横一列に並びバツサバツサと刈り進んでいくのである。作業中の楽しみは、刈られた草の中から小動物が飛び出してくる。時にはまむし（蛇？）がニョロニョロ出るとカンボーイが、ヤポンスキー・ピタミン・ピタミンと呼ぶ。早い者勝ちである。捕らえるとその場で口から引き裂き、串刺しにして腰にぶら下げた缶詰の空缶に入れておく。昼休みに捕獲物を焼いて食べるのである。現場への道すがら、野草や食べられそうなのは何でも食べた。生きがためとはいえず、餓鬼道の亡者であった。

馬鈴薯の植えつけを済まし、そうこうするうちラーゲルへ帰るよう指示された。いよいよグモイが実現するのかと内心、心が躍った。

収容所へ帰るや身仕度を整え、来たとき同様、無蓋貨車に乗せられナホトカへ着いた。収容所へ入り切れずあふれており、私たちは露営であった。翌々日か、港前でスターリン閣下へ感謝の決議、インターナショナルなどの歌を大合唱した後、乗船できた船名は永祿丸であった。万感胸に迫り言葉も出なかったように思う。二十二年八月二十一日舞鶴港上陸。骨と皮にやせ細った体に鞭を打ち復員業務を終え、帰郷列車に乗りやつと安堵した。

あとがき

最も思い出したくなかったシベリア抑留体験、ラーゲルの明け暮れは、まさに地獄絵さながらで、人は極限の状態におかれたとき「いかに生きべきか」を痛烈に教えてくれたと思っている。二年弱の短期であったが、精神的、肉体的に与えられた苦難に満ちた屈辱的な経験を、帰国後の私たちの人生にどう生かすかが、

帰還した者の宿題となったのではないかと思ってきた。私は、三十有余年の公務員生活において、事あるごとにこの気持ちを中心に支えにしてきたと思っている。

かつて中国湖南省常德市を訪問し、思いがけなくも元日本婦人（残留妻と呼ぶ）に会った。彼女は大阪大空襲で焼け出され、満州に移住。良縁を得ての平和な生活も束の間、ソ連軍の侵攻により夫は召集、彼女は家・財産をなくし流浪中、国共内戦に巻き込まれ、夫（国府軍）とともに中国各地を転々、落ち着いたところが常德市であるという。いろいろ苦労話を聞かされたが、その中で、私の人生をこのように無茶苦茶にされたのは、私たちの生命・財産を守ってくれるはずの関東軍が私たちを見放したためではないかと同意を求められ、困った。

当時、関東軍にはソ連軍を抑え撃つ戦力もなかったし、停戦命令が出たのでやむを得なかったのではなかったか。そのため私たちはシベリアでその補償をしてきたつもりであるなど、弁明をした。その後、彼女は一時帰国で本市を訪問、再会したが、その後も文通を

している。今なお肉親探しに来る残留孤児や残留妻の問題もこれでいいのか。北朝鮮も同様で、望郷の夢破れ、寒さと飢えと病魔により非業の死を遂げた多くの在留邦人は各地の山野に眠っている。敗戦の惨禍は今なお根深い。

【執筆者の紹介】

松村晋二郎氏は、大正十三年二月二十七日、滋賀県八日市市に生まれました。昭和十七年三月、県立八日市中学校を卒業後、朝鮮咸鏡北道茂山邑にあった茂山鉄鉱開発(株)茂山鉱山に選鉱課技手として就職されました。

当鉱山は昭和十年ごろから三菱鉱業(株)の開発によるもので、埋蔵量は無尽蔵といわれ、磁鉄鉱を露天掘りで採掘していましたが、運搬には三十五トン積みみのダンプカーを使用し、ブルドーザーを使うなどスケールの大きさは東洋一といわれ、選鉱場においても二百五十馬力のモーターによるジョークラッシュャーなど驚くものばかりだったという。当山から清津にあった三

菱精錬所、日鉄製鉄所溶鉱炉上まで直送されていた。

昭和十九年十月十日、会寧にあった歩兵第七五連隊に現地入隊後の軍歴や抑留歴は御本人記述のとおりで、昭和二十二年八月二十一日舞鶴港上陸、復員されました。

復員後は、昭和二十三年十月、滋賀県庁に就職されました。同二十六年四月からは労働事務官(県庁勤務の場合は地方事務官)として県内各職業安定所歴任、同五十七年三月、長浜職業安定所長を最後に勇退されました。

その後、昭和六十二年八月から二期八年間、八日市市議会議員として市民の福利増進、市勢の発展に尽力されました。その間、総務、文民常任委員長、監査委員、副議長等を歴任されました。

また、兄弟三人がさきの大戦において戦没されている関係上、地区遺族会支部長として昭和六十年一月から今日まで務めておられ、その間、遺族会の有志とフイリピン、サイパン、テニヤン島などの戦跡を訪れ、慰霊巡拝に参加されている。

戦後五十周年記念事業として、市の助成を頂き、市長の参加を求め、フィリピンのコレヒドール島、ルソン島南部にあるパグサンハン（比島寺）やカリラヤなどで慰霊祭を行っておられる（弟がカンルバンで戦病死）。

また、全抑協関係においても、県連の要請を受け昭和六十三年二月一日に設立総会を開き、以後支部長として高齢化（年に二、三人は死亡）する会員の相談相手として活躍しておられる。

（滋賀県 松吉 勝司）

シベリア抑留

北海道 北村 忠 一

一、出生から入隊（大正十三年）

北海道の玄関口と言われた港町、そして今、観光都市と発展した函館市の郊外にて母親の手で育てられました。二男五女の末っ子として大正十三年一月九日、

行商をしていた家で出生しました。

昭和五年小学校に入学。六年生のころは一クラス四十人の男女別で、成績はまあまあでしたが、今で言う母子家庭でしたので中学校等は受験できず、当時の実業学校を選ぶしかなく、高等科を卒業して函館工業学校に入学することとなり、何となく「建築」を選ぶこととなりました。このことが軍隊で「工兵」となることが決まっていたようなものでした。

二、ソ連軍侵攻前（昭和十六年）

「建築」を専攻した私は昭和十六年三月春、勇躍して渡満、鞍山市にある旧満州に誇る昭和製鋼所の工務部建築課に技術者として入隊まで三年八カ月、鉄鋼生産の戦士として若い情熱を傾けていた。

昭和十九年十一月、営口市にあった満州第四七四部隊に初年兵として入隊しました。当部隊の装備は、兵器、被服、食糧など当時は割合に物が揃っていました。二十年に入って少しずつ食糧が不足になったようでした。部隊からは五名が甲種幹部候補生として選ばれ、チチハルの教育隊に入校することになりました。